

嵐山国有林の取扱に関する意見交換会
第2回会合
議事次第

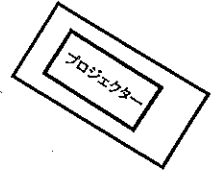
日時：平成21年9月4日（金）
15：00～17：00
場所：旅館 嵐山辨慶

議題：

- 1．第1回概要の確認
- 2．委員からの報告
 - (1) 高田研一 委員（植生の観点から）
 - (2) 深町加津枝 委員（景観の観点から）
- 3．意見交換
- 4．その他
 - (1) 本年度治山事業予定箇所の説明
 - (2) 次回会合の日程

「嵐山国有林の取扱に関する意見交換会」第2回会合 座席配置表

スクリーン

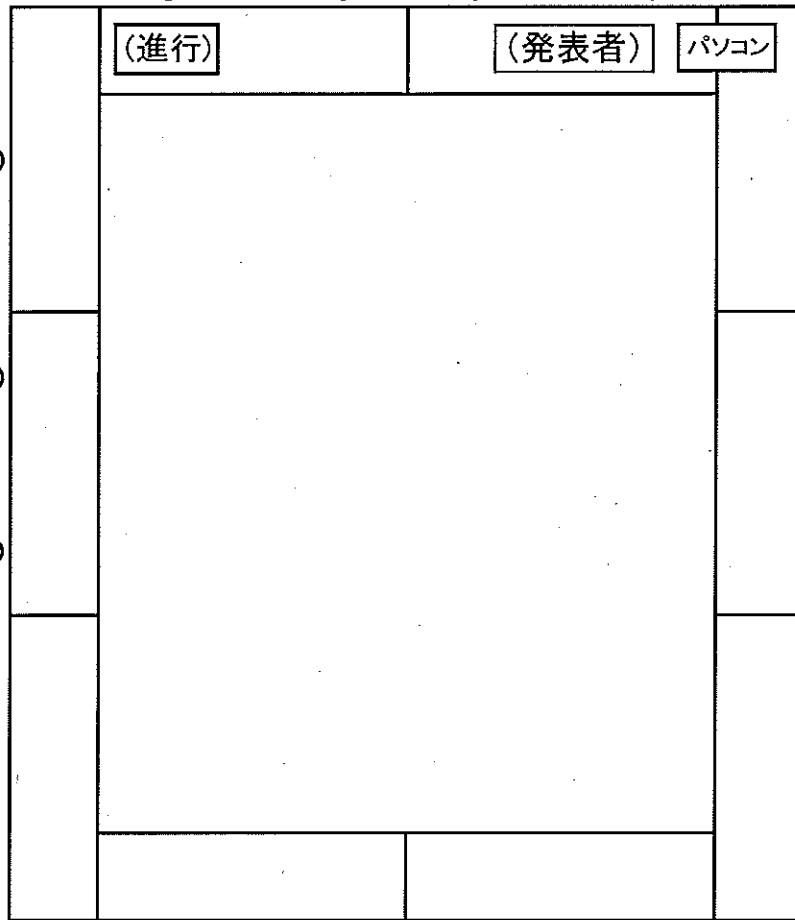


京都大学大学院
准教授 深町加津枝

森林再生支援センター
常務理事 高田研一

京都大阪森林管理事務所
所長 福田淳

京都大阪森林管理事務所
調整官(治山) 野村昭二



嵐山モンキーパーク
園長 浅葉慎介

嵐山保勝会
副会長 磯橋克康

嵐山保勝会
専務理事 田中克彦

嵐峽の清流を守る会
会長 梶承昭

嵐山保勝会
常任理事 中西一夫

嵐山保勝会
理事 早田一郎

森林総合研究所関西支所
主任研究員 高橋裕史

京都府立大学大学院
助教 三好岩生

近畿中国森林管理局 治山課
国有林治山係長 山田浩之

(記者席)

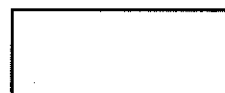
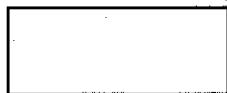
(記者席)

京都市林業振興課
課長 木戸俊康

京都市風致保全課
課長 水島幸弘

京都市文化財保護課
課長 梶川敏夫

京都府京都府林務事務所
所長 松下正徳



1. 嵐山の美しい自然風景には理由がある

→ ■自然の構成要素の見事な組み合わせ

嵐山の自然風景は、春の桜と新緑、秋の紅葉である。かつては、天端；尾根を占める松の樹形の見事さもこれに数えられた。

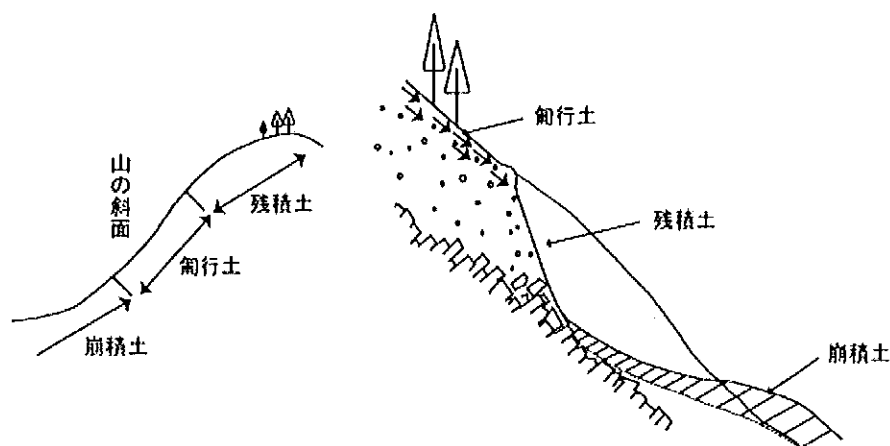
渡月橋や天竜寺界限から眺める嵐山の風情は、しかし、これらの森の木々の美しさのみにあるわけではない。大堰川に向かって切り立った山の斜面の傾きは紅葉が迫ってくる印象を構成させている。

また、紅葉は紅色のイロハモミジを主体とするが、ケヤキ、ムクノキ、コナラ、タカノツメなどの黄色系の黄葉を混ぜながら、針葉樹、常緑広葉樹の暗い葉色とのコントラストも見逃せない。

2. 不思議な嵐山の北斜面

景色の中心となっている渡月橋に近い北斜面はケヤキとイロハモミジを中心とする森林である。山の斜面を歩くと、立つのも容易ではないほどの急斜面であって、「匍行土（ほこうど）」と呼ばれる風化した岩盤の土壌層の上に斜面上部から崩れてきた「崩積土」が乗っている構造の土壌が、これほどの急斜面としては珍しいほどの厚みをもって堆積している。これがイロハモミジの典型的な効果であるといえる。

もともと嵐山の表層地質の主体はチャートと呼ばれる貧栄養の硬い岩盤で、この岩盤には層状に亀裂が入り、崩れると「揉み地」と呼ばれる礫質の基盤をつくる。イロハモミジは元々こういう基盤で生きてきた樹木である。これが現在でも嵐山北斜面の奥、西側部分の東北東に傾く斜面で認めることができる。



礫質基盤ではモミジは、長く広く根を展開する性質がある。

この根の性質を活かして、山の斜面の浸食を止め、土砂の崩落を防ぐ目的で古人は木を植えたのが嵐山のイロハモミジ林の始まりであったと推察される。

つまり、自然界には嵐山のような急斜面で土壌をこれほどまで抱え、厚みのある土壌層を好むケヤキの生育を許す面としての広がりをもつ斜面は存在せず、これほどのまとまりと規模を持つケヤキ（及びムクノキ）とイロハモミジからなる森は存在しないからである。

3. 嵐山の現状と変化

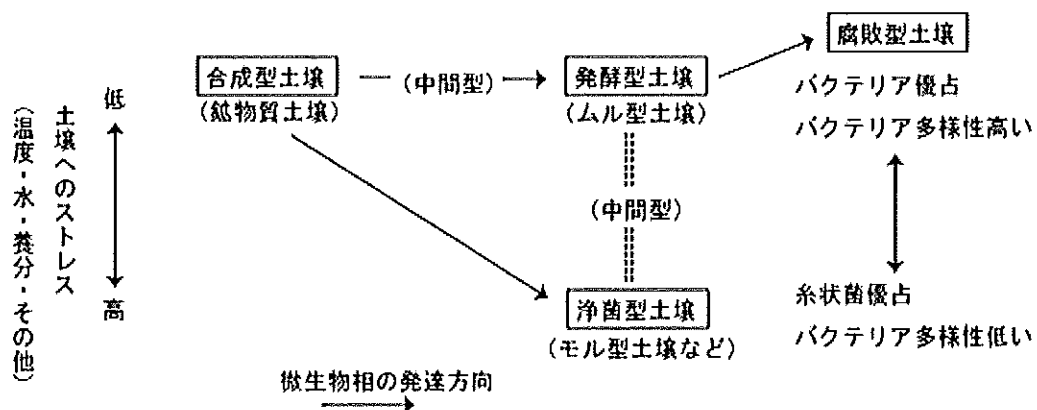
■アカマツ林をどうみるか？

嵐山の自然を守るための喫緊の課題として、従来取り上げられてきた最たるものは、スカイライン景観と呼ぶ「山の端（ヤマノハ）」の景色をつくり上げてきたアカマツ林の復元の是非についてであろう。

アカマツの衰退の原因は主としてマツノマダラカミキリが媒介するマツノザイセンチュウによる枯死とされており、直接の枯死原因はその通りである場合が多いが、本質的にはマツの体力低下による抵抗力の喪失がもっとも大きな問題である。

つまり、

アカマツは土壌バクテリア相の発達する肥沃な土壌を嫌い、貧栄養となる酸性土壌で生きる担子菌（キノコ類）との共生関係で暮らす樹木であって、このような環境であるためには、①寒冷地である、②水分が常に欠乏する岩盤（ときに酸性苔であるミズゴケがつくる過湿な浮島）、③山崩れ直後の新鮮な土、激しい山火事を受けた斜面、落ち葉まで採取する人為を被るといった養分不足の立地のいずれかの条件が充足されていることが必要な樹木である。



京都のような温暖な地でアカマツがまとまった森を維持できたことは、西山や東山に多くみられるチャート質の岩盤がつくる表土が浅く貧栄養の立地が広く分布していたこと、そこを町への薪炭材の採取の場として利用し続けてきた歴史があったことゆえにあり得たことだと理解することがよい。

そういうライフスタイルを根底から変えた社会にはもはや歴史的なアカマツ林を守るためには大きなコストを要することが基本である。

抵抗性マツと称するマツノザイセンチュウへの抵抗性を示すアカマツを導入したところで、アカマツに適する立地は徐々に損なわれていて、徹底した広葉樹伐採、落葉・落枝除去を行わずに富栄養化した土壤環境にまとまったアカマツ林が戻ることはない。

ただし、五山の送り火に供するアカマツ材はどうしても京都で守っていく、あるいは、アカマツ林に対する観光客のつよい憧憬があって、それらのことによって京都のイメージづくり、観光産業に大きな貢献があるのだとすれば、その利益の一部分を削ってでもアカマツを再生することは技術的には可能である。

■桜の景色が失われつつある

かつて嵐山のあちこちにヤマザクラがあって、春は全山が桜色に染まるほどあったのだという。それが本当かどうかは今となっては確かめようがないが、しかし、確かに近年ヤマザクラが減少していることは間違いがない。

大堰川沿いに植えられたソメイヨシノを楽しむ人々が多いが、このソメイヨシノであれば、全国津々浦々に植えられているものであって、別段、わざわざ嵐山まで来て見るほどのことでもない。桜に染まる嵐山の全体を人は楽しんできたのである。

ヤマザクラは本来、貧栄養で通気性にすぐれた土壤が厚く堆積する「土溜まり」；崩積性基盤にいち早く出現して生育する樹種であって、周辺樹種が生育して森の構造が成熟するとともに衰退して消えていく。嵐山でも同じことが起こっている。

嵐山の北斜面が桜色に染まったというのは、この斜面のところどころで小さな崩壊が生じ、その崩壊下部の土溜まりや流下した崩積土が厚みのある崩積性圃行土を斜面各所に生み出し、ここに植栽され、あるいは自然生えしたヤマザクラがよく育って嵐山の桜の景色をつくりだしていたのであろう。

しかし、現状は過去 50 年以上にわたってこの斜面は比較的安定してきており、100 年前に見られたようなヤマザクラが好む明るい林地は存在しない。ここでは、現在、アラカシ、アカガシ、カゴノキなどの常緑広葉樹や、ケヤキ、ムクノキ、イヌシデ、イロハモミジなどの落葉広葉樹が育っており、林内にはヤマザクラの枯損木が倒木となって散在している箇所を観察できるし、健全木の場合も周辺の高木性樹種に被圧され、樹冠が縮小し、腐朽菌が侵入し、その結果として樹勢低下がみられる株が多く認められる。

■老齢化したイロハモミジ林

イロハモミジの多くは植栽されたもので、よく育っているところが多い。戦後になって植栽された箇所もあるが、これは主として景観目的として植えられたものである。これに対して急勾配斜面で植えられた樹齢二百年に及ぶような古い植栽木はよく大径木化してお

り、ケヤキなどの大高木を加えながら、斜面の土砂をよく抑えるすぐれた治山効果を発揮するとともに、景観的にも高い資源的価値を有している。

しかしながら、古い時代に植栽されたイロハモミジ林は、どこも林内下層、林床にイロハモミジの若齢木が存在せず、現在の大径木が急斜面地で重力バランス的に持ちこたえられなくなると、倒伏枯死する恐れがある。

いずれにしても群落において単純な樹種でかつ同じようなサイズの株が揃う同齢林構造は周期的に大きな攪乱（森の崩壊）を生みやすく、必ずしも現況の嵐山のすべてのイロハモミジ林が安定な構造にあるとは言い難い。

■山が侵食、崩壊していく

嵐山の侵食、崩壊は古い時代から続いていたことは確実であるが、顕著な崩壊地形はきわめて古いものであって、渡月橋方面から見える範囲では目立つ箇所はほとんどない。

しかし、小規模であるがチャートが礫化して表層の崩壊が進んでいる、あるいは進む可能性のある箇所はかなりの範囲に及ぶものと考えられる。

これらの崩壊が小規模に留まっているため、景観への影響は小さいが、旧来、斜面を重なり合うように進むこの小規模表層崩壊によって攪乱を受けた箇所で森林の更新（若返り）が起こっていたが、近年の森の発達状況では規模の小さい崩壊では若木を育てるに十分な光が林床に射し込まず、また若木が発生しても直ちにシカによる食害によって失われる事態が生じている。

今後の山腹斜面の侵食と崩壊については、大規模な崩壊は硬いチャート基盤であることから起こりにくいものの、シカの食害によって林床の植生が著しく失われていること、岩盤に根系を食い込ませているアカマツが枯れ、その根系の腐食分解が進んでいること、同じくコナラは大径木化し、今後京都市内で被害が急拡大しているカシノナガキクイムシ被害によって枯死する恐れがつよいこと、崩壊を起こしやすい急斜面地全体で樹木の大径木化によって基盤が不安定化しやすいことなどから、風化により礫質化したチャートの小規模な表層崩壊は多発する可能性がある。

また、林野庁では表層土の侵食を抑えるための対策を講じており当面は問題がないが、先に挙げた古い時代のイロハモミジ植栽林の一部が崩壊するなどの大規模な表土侵食、崩壊の恐れは残っており、これについてもいずれ本格的な対策を要する時が来るであろう。

■アオキが消えた

かつて嵐山では発達した樹林地の林床の多くをアオキが占めていて、一時、その旺盛な繁殖が森林の更新にとって障害になるのではないかと危惧されたときもあった。

しかしながら、近年のシカによる食害はこのアオキをほとんど壊滅状態に追い込んだほか、他の林床植生に対しても大きな被害を与えている。

林床植生に大きな被害を与えるということは、次世代の若木が供給されないということ

であり、森林の健全な世代交代にとっての大きな障害となっている。しかし、一定密度のシカの生息は新たな実生の発生にとって一定の意義があり、シカがいなくなる事態を目指すのではなく、どういったバランスの下であれば、健全な森林生態系が維持されるかを知っておくことが大切である。この意味で、今後、このシカの生息状況と植生、森への打撃に関する詳細な調査と評価が急がれる状況にあるだろう。

4. 嵐山に人の手が及ばないとすれば

嵐山のほぼ全域を踏査した結果、ここの森林立地からみて、現行の気候環境でかつ人為や過剰なシカの食害がないと仮定した場合、北側斜面の斜面下部から尾根に至るまでの区間で出現する生育可能構成種を推定すると、一例として以下のような樹種が挙げられると想像される。(ただし、草本種、ツル性樹種、一部を除く先駆性樹種、溪畔性樹種は含まない。また、場所によって樹高が変化するので、場所に合わせて大体の樹高特性を示した。)

<尾根筋>

露岩を含む礫質尾根(残積土)

高木性樹種：アカマツ*、ツガ、モミ、アカガシ、アカシデなど

亜高木性樹種：コバノトネリコ、ナナカマド、ザイフリボク、カナクギノキ、アオハダ、
タカノツメ、ウリハダカエデ、ウリカエデ、ヤマウルシ、クリなど

低木性樹種：コバノミツバツツジ、アセビ、アカミノイヌツゲ、ナツハゼ、ネジキ、
スノキ、ウスノキ、アクシバ、コバノガマズミ、シャシャンボ、コックバネ
ウツギ、ウスギヨウラク、マンサク、ネズミサシ、ヒサカキ、クチナシなど

岩盤粘土化土質尾根(残積土;但しまとまった粘性土質尾根はなく、礫質と混じり合う)

高木性樹種：ヒノキ、コジイ

亜高木性樹種：ソヨゴ、クロバイ、ヤマモモ、タカノツメなど

低木性樹種：モチツツジ、ヒサカキ、アセビ、シャシャンボ、ナワシログミなど

<斜面上部>

凸型斜面(礫質残積土または礫混じり残積土)

高木性樹種：コナラ、モミ、ツガ、アカガシ、ツクバネガシ、アカシデ、クリ、
(アカマツ)

亜高木性樹種：モチノキ、カナクギノキ、ウリハダカエデ、リョウブ、タカノツメ、
コバノトネリコ、ザイフリボク、アカミノイヌツゲ、ソヨゴ、ヤマウルシ
アラカシ、ナナカマド、サカキ、カナメモチ、アオハダなど

低木性樹種：コバノガマズミ、コックバネウツギ、ツクバネウツギ、スノキ、ウスノキ、
アクシバ、モチツツジ、コバノミツバツツジ、ネジキ、シャシャンボ、
ヒサカキ、ウスギヨウラクなど

平衡斜面（礫を含む匍行土、一部に小規模の土溜まり）

高木性樹種：ウラジロガシ、ツクバネガシ、アカシデ、コナラ、タムシバ、コジイ、イヌザクラなど

亜高木性樹種：ヤマウルシ、ヤマハゼ、コバノトネリコ、タカノツメ、コシアブラ、ザイフリボク、ソヨゴ、ナナカマド、ナツツバキ、モチノキ、サカキ、リョウブ、アラカシ、カナクギノキ、ミズキ、シキミ、ウワミズザクラ、フジキ、チドリノキなど

低木性樹種：ガマズミ、ミヤマガマズミ、ムラサキシキブ、ヤマツツジ、モチツツジ、ウスノキ、ヒサカキ、イヌツゲ、ヤマヒョウタンボク、カマツカ、ウリノキ、コマユミ、イボタノキなど

<斜面中部>

凸型斜面（残積土または残積性匍行土）

高木性樹種：ツクバネガシ、アカガシ、アラカシ、モミ、コナラ、コジイなど

亜高木性樹種：モチノキ、ナツツバキ、カナクギノキ、ヤマコウバシ、リョウブ、クロバイ、リンボク、ウリハダカエデ、アオハダ、タカノツメ、ヤブツバキ、ソヨゴなど

低木性樹種：ガマズミ、ミヤマガマズミ、ムラサキシキブ、ヤマコウバシ、ヤマツツジ、ヒイラギ、ネジキ、ツクバネウツギなど

平衡斜面（礫を含む匍行土）

高木性樹種：ヤマザクラ、イヌザクラ、イロハモミジ、ホオノキ、イヌシデ、ツクバネガシ、アラカシなど

亜高木性樹種：カゴノキ、シロダモ、ヤブニッケイ、シキミ、イヌガシ、ウワミズザクラ、ウリハダカエデなど

低木性樹種：ムラサキシキブ、ヤブムラサキ、ヤマコウバシ、カマツカ、ヒイラギ、コマユミ、イボタノキ、ガマズミ、ツクバネウツギなど

凹型斜面（崩積性匍行土）

高木性樹種：ヤマザクラ、カスミザクラ、イヌザクラ、イタヤカエデ、タマミズキ、クス、ムクノキ、ケヤキ、シラカシ、カヤなど

亜高木性樹種：イロハモミジ、カゴノキ、カクレミノ、ヤブニッケイ、シキミ、イヌガシ、ウワミズザクラ、ミズキ、エゴノキなど

低木性樹種：ヤブツバキ、アオキ、シロバイ、イヌビワ、カマツカ、ヒイラギ、ウリノキ、クマシデ、イズセンリョウ、ニワトコなど

<斜面下部>

凹型崩積性斜面

高木性樹種：イチイガシ、ウラジロガシ、ケヤキ、ムクノキ、エノキ、クス、スギ、ヤマザクラ、カヤ、カツラ、ムクロジなど

亜高木性樹種：カクレミノ、ネズミモチ、カゴノキ、シリブカガシ、アラカシ、イロハモミジ、シキミ、リンボク、ヤブニッケイ、シロダモ、ヤブツバキなど

低木性樹種：アオキ、アリドオシ、イヌツゲ、ムラサキシキブ、ヤブムラサキ、シロバイ、ハナイカダ、ヤマアジサイ、チャノキ、イヌビワ、ヤツデ、イヌガシ、イズセンリョウなど

凸型残積性斜面

高木性樹種：コジイ、モミ、ツクバネガシ、ナナミノキ、ケヤキなど

亜高木性樹種：アラカシ、リンボク、カクレミノ、ヤブニッケイ、シロダモなど

低木性樹種：アオキ、シロバイ、ヤブツバキ、イヌガシなど

5. 木を植えるということ

木は植えなくとも森は続いていくのが本来の自然である。しかし、木を植えることなく、自然のままに委ねておくと、次のような結果を招く可能性がある。

- ① 山の侵食、崩壊が発生し、森が覆う嵐山の風情が決定的に損なわれる。
- ② 長い間の自然利用によって、本来の自然の構成種が近辺の自然から失われているため、繁殖力のつよいコジイなどの少数特定樹種ばかりが目につくようになる。
- ③ 落葉広葉樹が減り、常緑広葉樹が増える。この結果、サクラも新緑も紅葉も徐々にみられなくなる。

したがって、嵐山を長く保全していこうとすれば、広葉樹の植林を継続していくことが避けられない。

このとき、苗木を植え、育てていく時のポイントがいくつかあるので整理しておきたい。

<木を植えるときの計画と実施の流れ>

(1) 何のために木を植えるのかを整理する

↓

(2) どんな樹種を植えるのかを考える

↓

(3) 植栽目的に沿って、どの場所で植えるのかを決める

↓

- (4) 植える予定の場所を精査する
↓
- (5) 用いたい樹種の生育特性からみて、その場所で順調に成木まで育つかどうかを考える
↓
- (6) 林相改善の場合は、樹冠の開放形状とこれによる光環境を推定し、植栽予定樹種の生育を可能とするための伐採木、または強剪定実施木を決定する
↓
- (7) もっとも適した苗木の規格仕様を決める
↓
- (8) 植栽木の将来樹冠を想定し、光環境、競合木の位置などからみて必要な植栽苗木密度を決める
↓
- (9) 現場で適切な配植位置を決める
↓
- (10) 樹冠拡大予測を行い、配植に間違いがないか検討する
↓
- (11) 配植位置での植栽基盤を検討し、必要であれば補助材（客土、基盤柵、マルチング材、防鹿柵等）を決める
↓
- (12) 材料を確保、検収する
↓
- (13) 施工準備を行う
↓
- (14) もっとも適した植栽法によって苗木を丁寧に植栽する
↓
- (15) 植栽後のモニタリングを行う

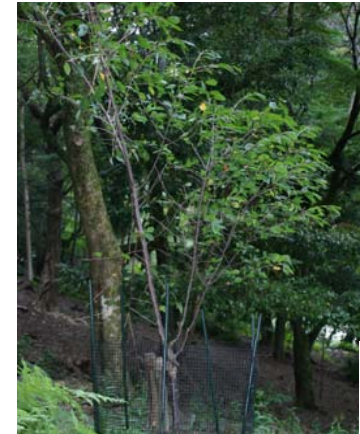
以上の要点にしたがって木を植えるためには、林野庁京都大阪森林管理事務所の専門家による計画の立案を求め、これに基づいて丁寧に木を植える。植えた苗木は必ず後から観察して、うまく成長しているかどうか、植えた人が確かめるなどの努力をしていただくことが望ましい。

*40年前に木を植えたときと、今、木を植えるときとは、同じ面積であっても周囲の木の高さが異なっているために、光の射し込み方、つよさが異なる。これをよく読みとって木を植えることが大切である。

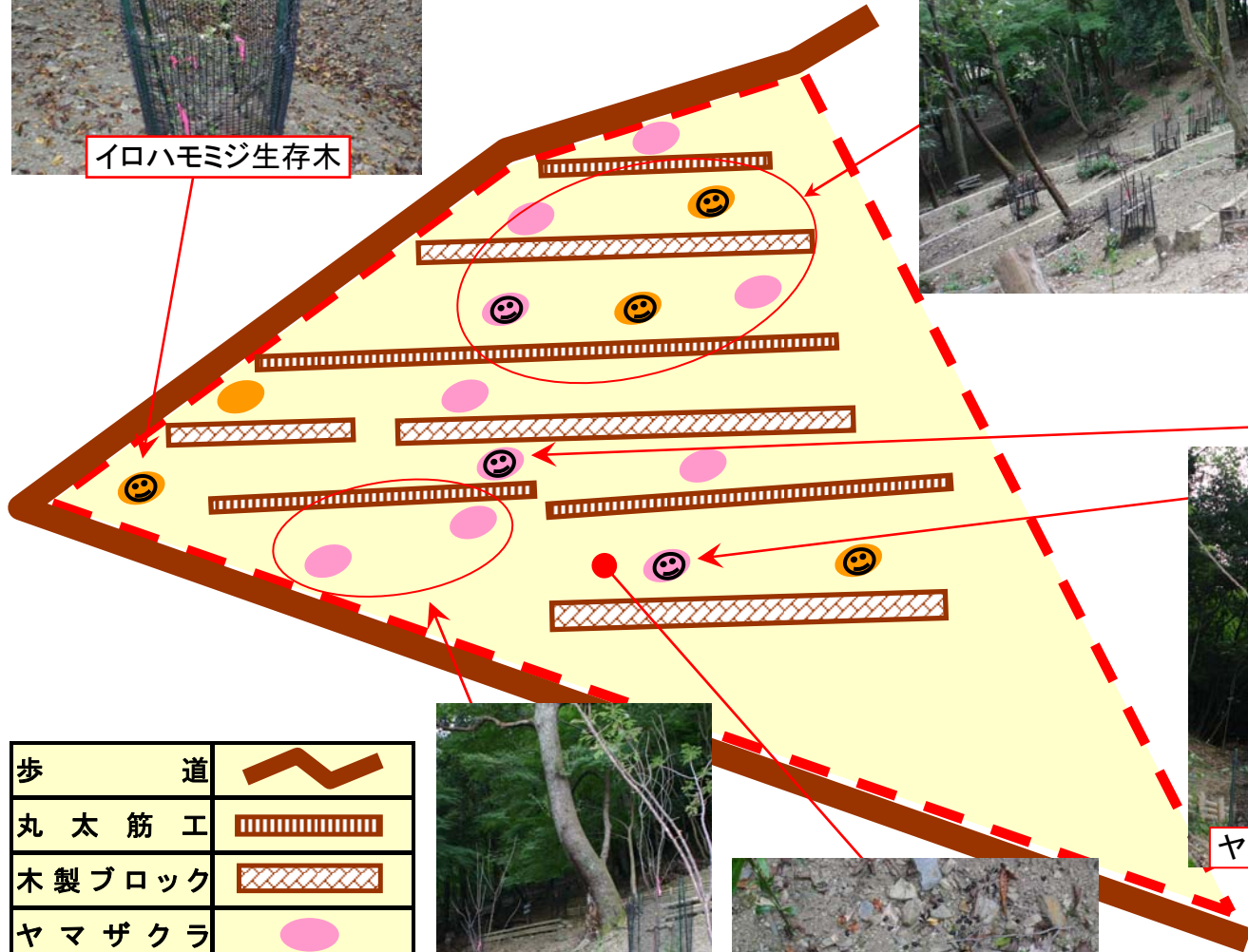
平成20年度「嵐山植林・育樹の日」植栽箇所の枯損状況 (H21.7.23調査)



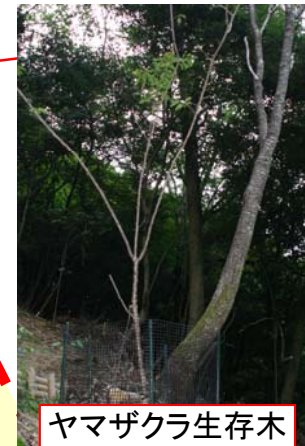
イロハモミジ生存木



記念植樹(ヤマザクラ)は3本共に良好な成長



ヤマザクラ生存木 (枝の折損が見られる)



ヤマザクラ生存木

歩道	
丸太筋工	
木製ブロック	
ヤマザクラ	
イロハモミジ	
生存木	



ヤマザクラ枯損状況



シカの糞粒

樹主	植栽	枯損
ヤマザクラ	10	7
イロハモミジ	5	1



嵐山の景観



渡月橋・亀山上皇「くまなき月の渡に似る」

授業を受けた学生の感想から（印象に残った京都の景観）

昨年高校で行ったが、渡月橋を川辺から見る景色は人工物である橋と、自然の物である山や川が上手く調和し、一体となった景観を作り出していると思った。法学部

渡月橋を見ると自然で悠々自適に生きていた昔の人々の思いを共有することができて、僕の心も自然に同化されて落ち着かれています。工学部（留学生）

近代的なビルが立ち並び、いわゆる「都会」となった京都市内にある、自然の美を間近に感じられる貴重なスポットであり、また観光地としての独自の存在感を築き上げている。医学部

人間が作り出した橋がこんなにも自然に一体化していることに驚き、人間の文化と自然がうまく調和しているように思いました。総合人間学部

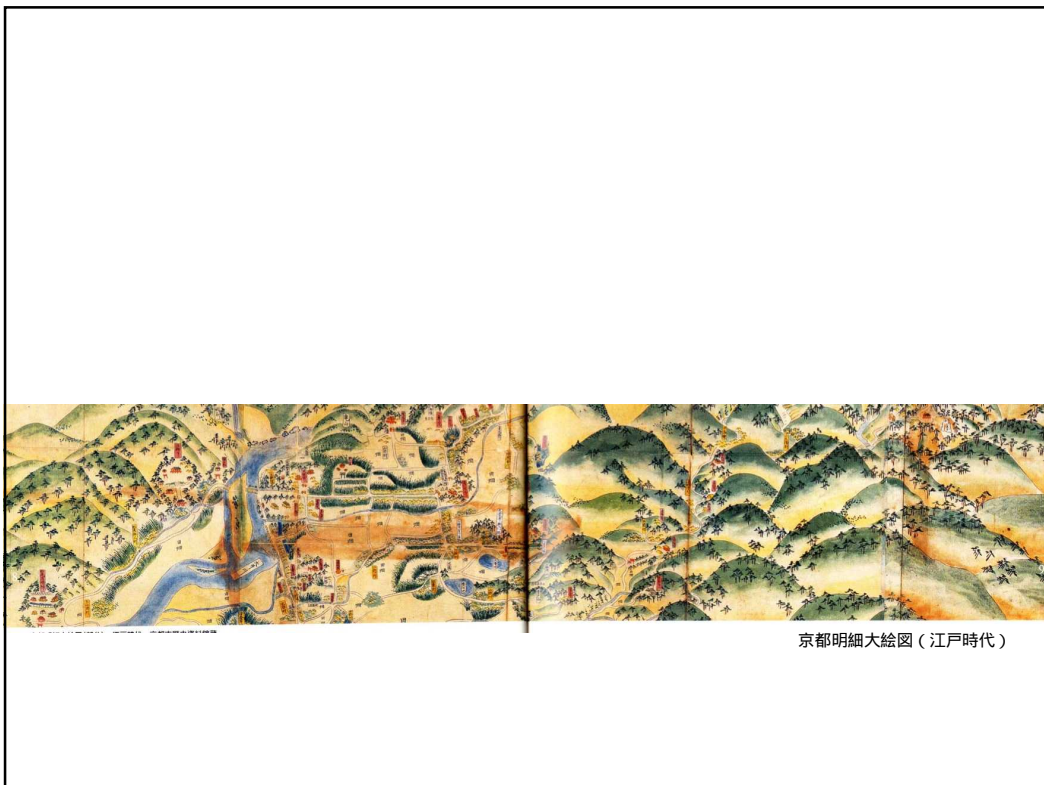
景観が昔から続いているものであり、文化を表していると思うと、人間が作り上げてきた文化は大切にすべきだと改めて感じ、また歩きたくなった。農学部

松や桜が中心に広がっていたが1990年代には松枯れや桜が減少し常緑の広葉樹が中心となっていた。その対比には考えさせられるものがある。景観は人の生活を映し出す。景観を通して自分たちの生活を省みることができるのではないかと思った。理学部

- 1255 龜山上皇が後の天龍寺となる
場所に別荘造営、この頃より吉
野の桜を嵐山に移す
- 1346 夢窓国司による天龍寺作庭、
龜山十境を定める
- 18世紀中ごろ以降、天龍寺による
桜、松の植栽、管理の記録豊富

大井川筋絵図(江戸時代)

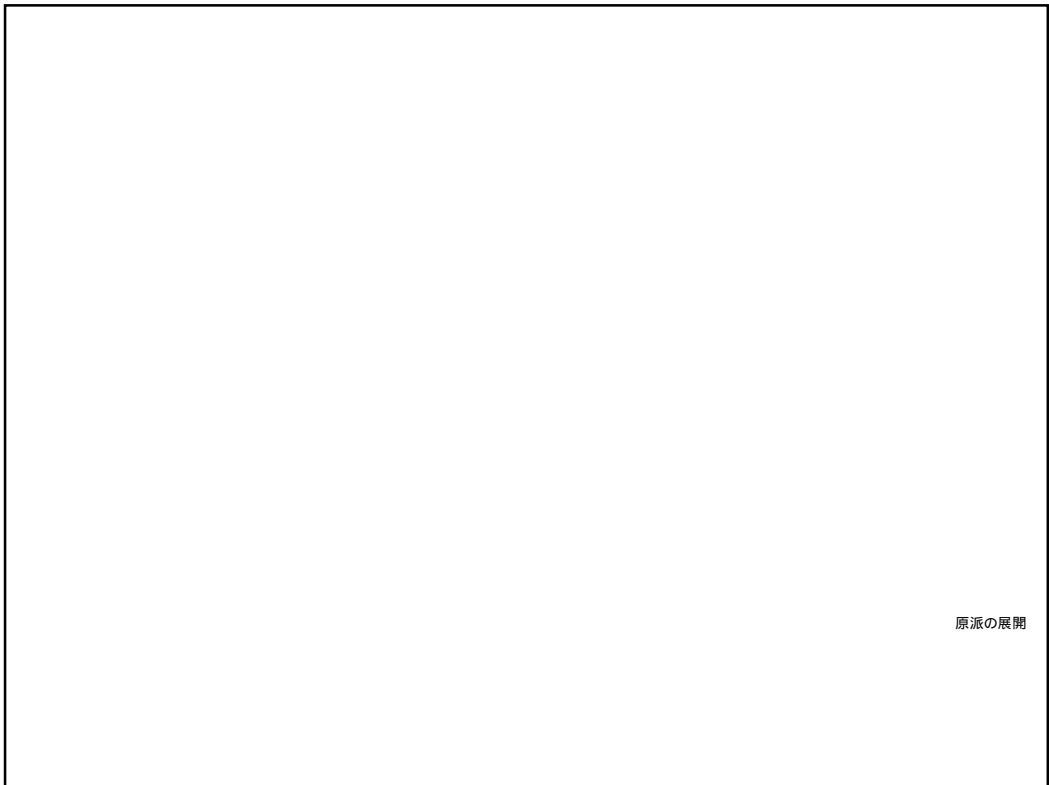
「嵐山あたりの史跡と伝説と古典文学を訪ねて」



京都明細大絵図(江戸時代)



画題等:「都名所之内」「嵐山三軒家より眺望」「となせの滝」



原派の展開

(1783~1856)



花洛一覽図 嵐山付近 1808

嵐峡双幀 塩川文りん麟(1801-1877) 嵐峡春霽図 幸野樺嶺(1844-1895) 雨中山水図 塩川文りん麟

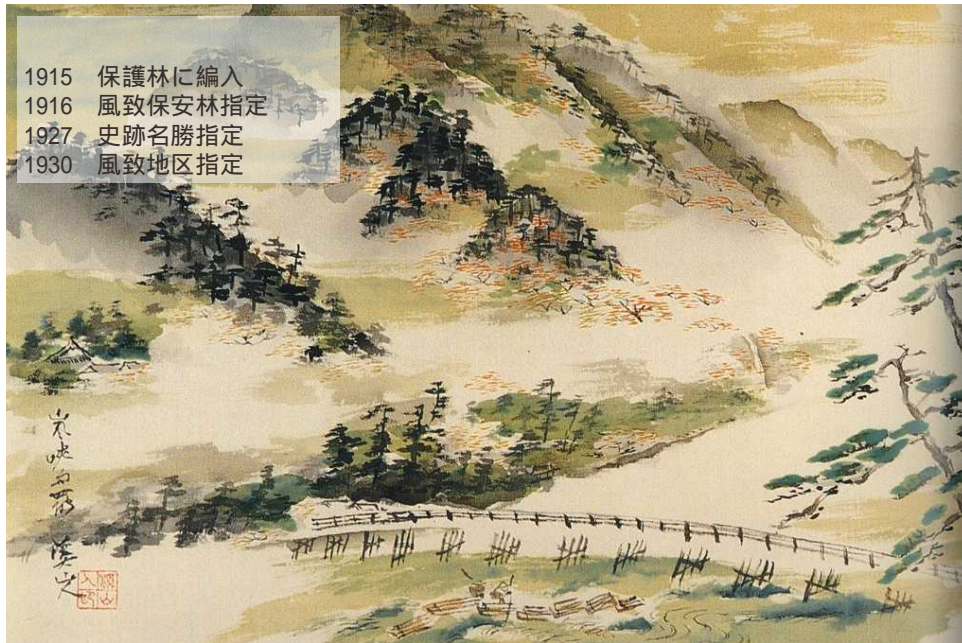
三船祭図(原在泉1849-1916)

1890 ~ 1893)



- | | |
|-----------|--------|
| ■ マツ林 (小) | ■ 広葉樹林 |
| ■ マツ林 (大) | ■ 竹林 |

仮製地形図 嵐山周辺 1889



1915 保護林に編入
1916 風致保安林指定
1927 史跡名勝指定
1930 風致地区指定

嵐峡雨籠

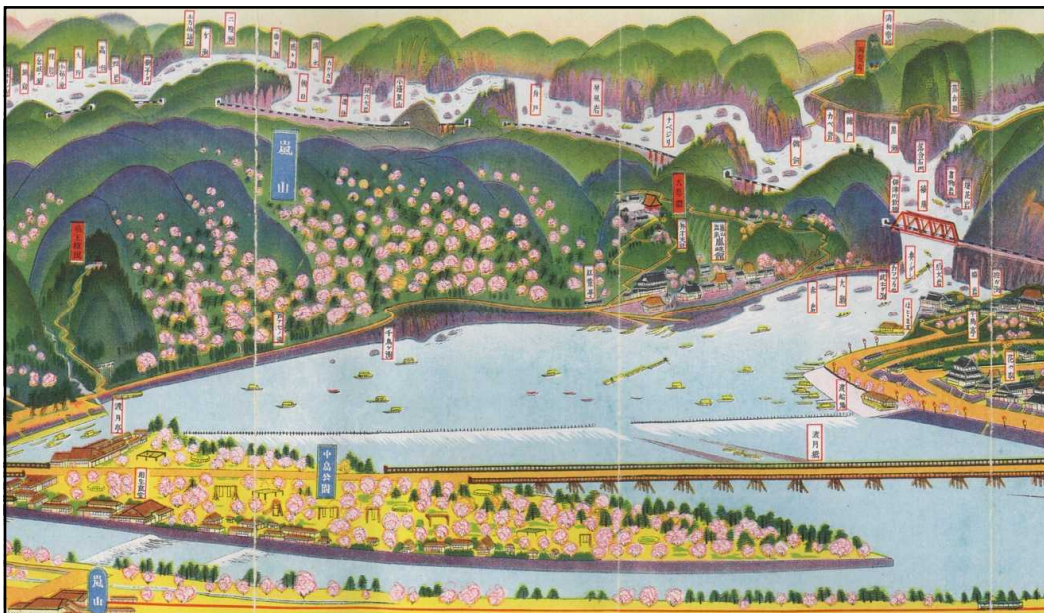
富田溪仙 1936



「幕末・維新彩色の京都」より



国際日本文化研究センター所蔵



嵐山名所図絵 吉田初三郎

1930

1927 史跡名勝指定
1930 風致地区指定
1931 「嵐山風致林施業計畫書」
策定



對岸ヨリ見タル半西腹ノ景觀
中腹以下ノ潤葉樹林ト其以上ノ赤
松林トノ間ノ隔線



對岸ヨリ見タル法雨山

嵐山風致林施業計畫書（1932）原本写真より

1960年代 マツ枯れ被害が顕著に
1967 歴史的風土特別保存地区指定





- 1982 嵐山育林植樹の日設置、
営林署、地元保勝会の共同で植
樹実施
- 1987 第5次地域施業計画により
「嵐山風景林」に指定
- 1989 以降、植樹祭に際し0.05haの
群状択伐を実施

嵐山 現在の様子



嵐山秋宵

美術書出版株式会社 清水信行(2001)

嵐山の景観と生け花（嵯峨御流）



平安の初め、嵯峨天皇が大沢池で船遊びの折に、小島に咲く可憐な菊を手折られ、殿上の花瓶に挿されたところ、その姿が自ずから「天、地、人」の三才の姿にかなっていたと伝えられている。

三勝の景色

10



『大沢池 大覚寺』（『都名所図説』より）江戸時代 個人蔵

左側に天神島、右側に舟ヶ島の両島を料や船、西端、嵯峨石を控って仕立て、その中間に嵯峨石を配し、二島一石の景色をつくりあげます。さらに水盤の手前の堤として高麗を押し、大沢池の空照をいけます。

庭湖之景

京都・嵯峨は名所数種が多く、景勝の地としてよく知られています。
嵯峨御流は、日本国内の庭園である大沢池の景色をいけ表した「嵐峡之景」、舟の渡津川と嵐山の桜を写した「嵐峡之景」、清滝川の流れて紅葉を取り巻いた「高麗之景」があり、これを「三勝の景色」と呼んでいます。
この景では、それぞれにふさわしい草木や石を配し、雅趣を盛り込みながら美しい景観をいけ表します。



手前の堤から保津川を隔てて、対岸に咲き誇る桜の嵐峡の景観の美しさをいけ表します。

嵐峡之景



花枝/山桜 園蔵 古今 流石日隆 7



嵐山 法輪寺 渡月橋（『都林泉名勝図会』より）江戸時代 個人蔵

高麗之景

この花では照紅葉と青紅葉を用いて右岸と左岸（高麗）を取り、その間を流れる清滝川の辺りに紅葉していく景観を美しくいけ表します。



『高麗 養有園』（『都名所図説』より）江戸時代 個人蔵



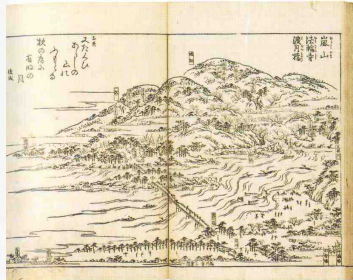
嵐峡之景



春の保津川と嵐山の桜を写す

それぞれにふさわしい草木や石を配し、雅趣を盛り込みながら美しい水面をいけ表す

手前の堤から保津川を隔てて、対岸に咲き誇る桜の嵐峡の景観の美しさ



嵐山 法輪寺 渡月橋（『都林泉名勝図会』より）時代 個人蔵



嵐峡之景

山城 嵐山城



お城のデータ

所在地： 京都府京都市西京区嵐山元祿山町
 遺構： 曲輪、石垣、土塁、塹壕、堀切
 形式： 山城 築城者： 香西元長 築城年 代： 明応6年

見どころ



嵯峨野、嵐山・渡月橋、京都観光スポットとして有名な
 だが、この嵐山山頂に城が築かれていたなどと、嵐山を
 訪れる観光客の内何人の人が知っているだろうか？

比高33.5m、麓の阪急嵐山駅から登山道を嘯ぎなが
 ら登ること約1時間半、やっとの思いで嵐山山頂へ。
 そこは全く整備されておらず、曲輪群は雑木に覆われ、
 城の遺構を確認するのに一苦労させられる。

それでも、堀切や土塁、土止めの石積み等の遺構を確認することができた。特に、
 南端の曲輪下に設けられた7本の畝状堅堀群と堀切など見応えのある遺構であった。
 高、嵐山城は、山頂部に主郭を置き、南北に延びる尾根筋を削平して曲輪を連郭式配置
 した縄張りとなっている。

<http://www.asahi-net.or.jp/~qb2t-nkns/arasiyama.htm>

京と丹波を扼する一嵐山城

嵐山城は細川政元暗殺の首謀者である香西元長が築いた山城で、桂川（保津川）を東に見下ろす嵐山山頂にある。登山道は西山トレイルとして整備され、要所に案内標識が設けられ、嵐山城址まで軽快な山歩きを楽しみながら進むことな
 どり着くことができる。山道をまたいだら登っていくと、城址最南端に穿たれた堀切が現われ、そのすぐ上の小山が城址最南端の曲輪で、城址はそこから北方の尾根全体に展開している。南曲輪の北側には土塁が残り、その向こうは堀切が穿たれている。堀切を越えて急坂を登ると階段状に曲輪が設けられ、一部には石垣も残っている。主郭は北のピークにあり、その北側には帯曲輪、最北端には鹿口状の構形が確認できる。決して大きな城址ではないが、嵐山トレッキングを楽しみながら城址も楽しめるという格好の山歩きスポットといえそうだ。ところで、嵐山城を築いた香西元長は細川澄之を擁して権勢を振るったが、それもつかの間、細川澄元の反撃によって滅亡、嵐山城も西園衆の攻撃を受けて落城した。と記録に残っている。
 ・嵐山曲輪から嵐山方面を見る



登り口近くより嵐山を見上げる 竹林の登り道 苔寺との分岐-右手に登る 嵐山城址への標識 細い山道の続く



尾根道を歩き続ける 虎口？石垣？曲輪？などと思わせる地形・巨岩 途中のピークから嵐山山頂を見る

http://www2.harimaya.com/sengoku/zyosi/ym_arasiyama.html





嵐山の森林景観における地域らしさの評価構造

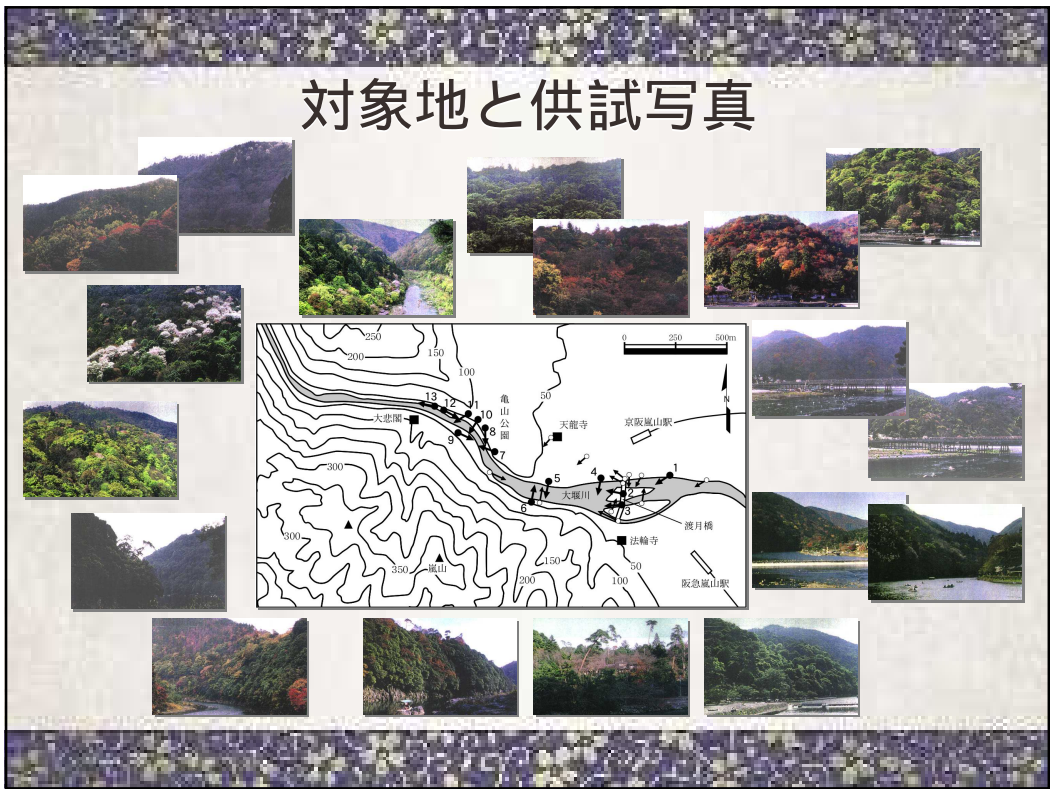
景観形成における地域性の重視

森林景観においても地域性の特徴を把握する手法の開発と事例の蓄積が求められる

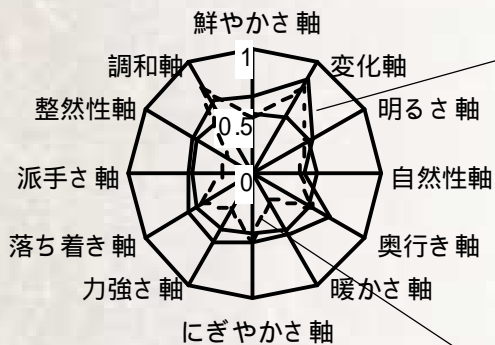
「地域らしさ」がどのような印象（群）によって形作られ、評価されているのか

京都市の嵐山周辺域を対象としてケーススタディ

計画への応用についても考察

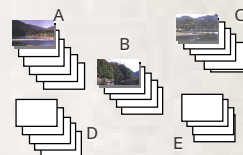


供試写真の印象軸適合率（例）

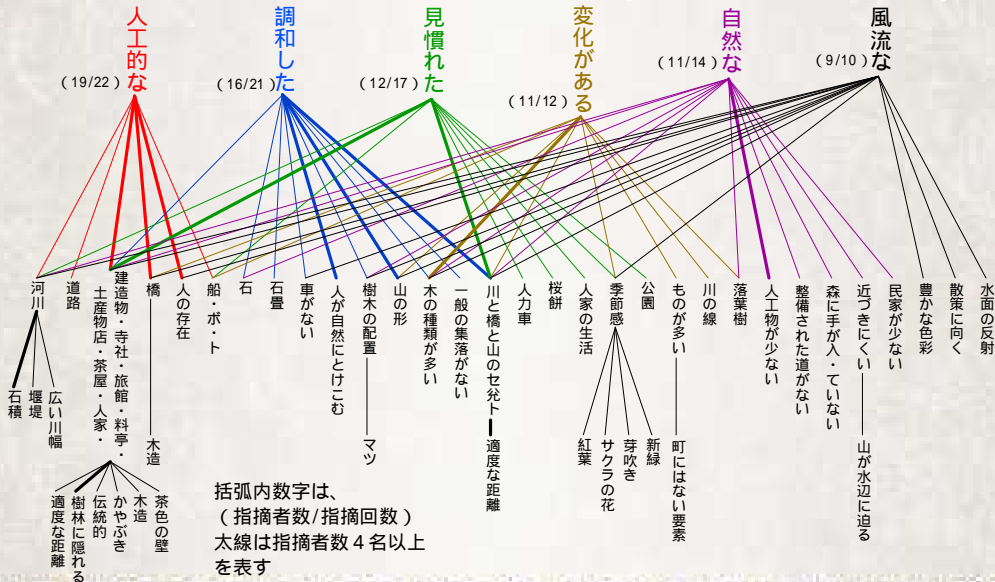


評価グリッド法の手順

1. 提示 全供試写真（30枚）を提示
 2. 区分 「30枚の嵐山の写真を，嵐山らしい，と思うものからそうでないものまで5段階（A～E）に区分して下さい，それぞれの枚数は自由です」
 3. 理由 「どのような印象でAはB（BはC，CはD，DはE）に比べて嵐山らしいと感じたのですか」
 4. ラダーアップ 「 だと嵐山らしいということでしたが，だとなぜ嵐山らしいと感じたのですか」
 5. ラダーダウン 「 だと嵐山らしいということでしたが，具体的に何がどうだと なのですか」
- 「3」へ戻り，次の組み合わせで繰り返す
AからEの段階はそれぞれ得点化（嵐山らしさ指標）



嵐山らしさの評価構造 (ラダーダウン)



「嵐山らしさ指標」の分布

